

# 沢柳政太郎と図書館教育

山田泰嗣・渡邊雄一

〔抄 録〕

成城小学校では創設者沢柳政太郎の理論的基底を他の教師たちが継承する形で教育実践が行われていた。我が国では最も早い時期に実施されていた図書館教育も彼の理論が基盤となって実践されたものである。本稿では、沢柳の読書論と図書館論を検討し、成城小学校における図書館教育との関連を考察した。彼の読書論と図書館論で示された近代的合理主義と仏教的な自律的主体形成論である修養論が、成城小学校での図書館教育実施に大きな影響を与えたことが明らかとなった。

キーワード 読書論, 図書館論, 図書館教育

## はじめに

学校教育の中で図書館が必要不可欠な設備として法的に位置づけられたのは第二次大戦後のことであり、それ以前は成城学園や玉川学園、成蹊学園などの私立学校や師範学校附属小学校などの極めて少数の学校において学校図書館の活動がみられたにすぎない<sup>(1)</sup>。これらの学校では、今日のような学校図書館必置の法的根拠やその設置を奨励する施策が無いにもかかわらず、学校に図書館が設置され、意欲的な活動がなされていた。制度的な保障が無い中で、どのような教育を目指すときに図書館は必要とされ、生成されていったのだろうか。本稿では、大正自由教育運動の中心校的存在であり、最も早い時期に本格的な図書館教育を実施していた成城小学校を創設し、その理論的支柱であった沢柳政太郎(1865-1927)の読書論と図書館論から学校図書館設置に至る過程を明らかにする。

## 第一章 沢柳政太郎の読書論

### 第一節 『読書法』における読書論

図書館利用と読書論が密接な関係を有することは言を俟たないが、ここでは沢柳政太郎の読書論について取り上げてみたい。沢柳の図書館論は主に大正年間に著されており、それ以前

には読書論の一部に図書館について述べられた箇所があるにすぎない<sup>(2)</sup>。よって、1917（大正6）年の成城小学校創立前後からみられる図書館論を考察する上で、それ以前に発表された読書論を検討することは重要な意味をもつ。沢柳の読書論の中で最もまとまった著作は、1892（明治25）年5月に刊行された『読書法』である。これは彼の文部省勤務時代に出版されたもので、「本書は英国碩儒アレキサンドル、バイン氏の研究術（アート、オヴ、スタディー）と題する論文、米国イェール大学総長ノア、ポルター氏著書籍と読書法、ダルトマウス大学教授チャールス、リチャードソン氏著書籍選択論等に拠り参酌編述せしもの<sup>(3)</sup>」と記されているように、リチャードソン、ポルター、ペーコン、ホップス、ミルトン、ロック、ギボン、ニュートン、エマーソン等の外国の著作を参考にして、当時彼が関心をもっていた心理学の知識を援用して一般読者に実際的な読書の方法を解説したものである。当時一流の外国の学説を集め読書を合理的に解説した本書は、「今日の各種の読書論に現れている読書論の根源を示すものとして、近代日本における読書論の系譜を辿る上において重要な書である<sup>(4)</sup>」と高い評価を得ている。

この中で、沢柳が説いたのは「読書法は書を読むもの、服膺遵守すべき規則を叙述せしものにして、能く読書の方則を守り之に拠り以て読書するときは、即ち心力を労すること少く時間を費すこと少くして充分の功益を収むるを得へし<sup>(5)</sup>」というように一般読者にとって効果的で利益のあがる「読書の法則」であった。それは、「漫然書を採り雑然之を読むときは、心を労すること多く時間を費すこと多くして反て僅少の功益をも得る能はざるなり<sup>(6)</sup>」というように読書法を知らずに学習を進める愚を警鐘したものであった。彼は読書の法則によって得ることのできる利益を6つ挙げ、次のように示している<sup>(7)</sup>。

- 一、精神を徒勞することなからしむ、
- 二、時間を空費することなからしむ、
- 三、精神を勞し時間を費すこと少くして反て大に智識を増進し能力を開発せしむ、
- 四、記憶力を補助すること大なり、
- 五、明確の思想を得しむ、
- 六、書籍の選択を誤まることなからしむ、

こうした利益を得るための法則が本書では解説されているのだが、今日の観点からいえば、何か特殊な法則が記されているというわけではない。ただ、沢柳が非常に恐れるのは、「時間を空費し精神を徒勞し心性の発達を害し智力を萎靡せしめ、又遂に漫読の悪習慣を養成するに至る<sup>(8)</sup>」といった、無規則にただ漠然と本を読むことであり、こうした弊害を除去するためにこの著作を発表したと考えられるのである。この読書の法則の中で、彼が最も重視したのは「読書は注意を以てす可し」ということである。「此法則たる読書法の綱領にして之を挙げれば

他の小規則は尽く是に従ふものなり」と述べているように、これを「読書法の金条」とした<sup>(9)</sup>。では、注意を以て読書するというのは如何なることなのだろうか。沢柳は、次の6つを挙げている<sup>(10)</sup>。

- 一、自己の学はんと欲する所の事項を記述する書籍を読むへし
- 二、自己の業務と直接間接の関係ある書籍を閲読すへし
- 三、確實の目的を以て読書すへし
- 四、専読の書籍を定め置き濫りに変更すへからず
- 五、閲読せんとする書籍の順序排列を一定すへし
- 六、凡そ読書するに際しては必ず是によりて智識を進め利益を得んとの念を想起して亡失せ  
さらしむへし

沢柳がいう「注意を以て」は、注意を喚起し精神を一点に集中するということである。注意を喚起するものとは「趣味を覚へしむるもの、面白味を感じしむるもの」であり、それが契機となり学習者の自発的態度は形成されていく。上記の各項目からは、彼の近代合理主義的な精神を窺うことができると同時に、人間形成における学習主体の自発性を重視する教育思想が既にこの時期に確立されていたことを確認することができる。

ところで、後年、成城小学校では、沢柳の提言の下に「分量主義<sup>(11)</sup>」の読方教授が推進されるが、これは従来の国語科において読方と書方が同時並行履修されていたこと、つまり、字を書くことと字を読むことが同時に課されていたのに対して、「書くことに頓着なく読みかたをどしどし進めて行く<sup>(12)</sup>」という多教材提供主義を採択することであった。こうした多読の推奨ともいうべき「分量主義」の読方教授を背景として、「読書科」が設置され、児童図書室における図書館教育も推進されるのである。つまり、成城小学校における図書館教育の成立過程において読書の分量は一つの大きな要因となったのであるが、沢柳は『読書法』においては、「須く数部の良書を撰て能く熟読玩味すへし徒に多読を貪る可らずと云ふにあり、若し夫れ読書の法を知らずして単に多読を貪るときは、其記性を衰弱せしめ其理性を攪乱し一生無智無学に終らんこと真にホッブス氏の言に合はんのみ<sup>(13)</sup>」というように、一見、多読に対して否定的ともとれる考えを記しているのである。しかし、ここで注意しなければならないのは彼が多読そのものを否定しているのではなく、多読による非効率性を否定しているということである。したがって、以下に示すように、たとえ読書の分量が多くてもそれが精神の発達に適っていれば良いとする。

蓋し精神の発達是人により一様ならず、或は多読に堪ゆるものあり、或は少読を以て満足せざるを得ざるものあり、故に何によりて読書の分量を定むへきか甚た拠る所なきか如し、今

試みに之を概言すれば精神の疲労を来して最早書中の意義を解する能はすして其趣味も感せず又記憶し能はさるか如きは即ち適度を超ゆるものと云ふべし<sup>(14)</sup>

沢柳は、精神の発達は一様ではないから読書の分量には個人差があり、その個人に適したものでなければならないことを説く。デューイ<sup>(15)</sup>などの新教育運動の理論的先達の主張が本格的に紹介される以前から、沢柳の著作には「発育」「変化」などの言葉とともに「発達」という用語が使われていることが指摘されているが<sup>(16)</sup>、ここでも彼は「発達」という用語を用いて読書の分量を論じている。

成城小学校において多読法、「分量主義」が採られるのに、一つの根拠となったのが児童語彙に関する調査研究であった。この調査の結果、新入学児童のもつ語彙数が予想以上に多かったことから、沢柳は「言語能力は年少の時に大なる発達を示す<sup>(17)</sup>」と考えた。そして、「児童の言語を白紙であるかの如き前提から行つて居る、現在の国語教授を根本的に改むる必要<sup>(18)</sup>」から、「分量主義」の読方教授が推進されるのである。このような言語能力の発達という観点から採られた「分量主義」には、個人の能力によって読書の分量を定めるべきという『読書法』においても示された沢柳の精神発達に対する論理が大きく影響したと考えられるのである。

## 第二節 『学修法』における読書論

『読書法』刊行から16年後の1908（明治41）年12月、沢柳は『学修法』を出版した。これは「学校に於て教育を受けつゝある者に対して、如何に教育を受くべきか、教師の教育上の働に対して、学生は如何に働くべきかを論究せんとする<sup>(19)</sup>」ために執筆されたもので、学習者の態度を論じたものである。内容的には『読書法』の延長線上にあるともいえるが、両者の間には質的な相違もみられる。『学修法』には、対をなす著作として、同年11月に執筆された『教師及び校長論』がある。沢柳は『学修法』を「被教育者の側より見たる教育学」と名付け、「生徒の側に於ける努力を生徒に向て系統的に論じたものだったが<sup>(20)</sup>、一方の『教師及び校長論』は、教育する側の問題を論じたものであった。つまり、沢柳はこの2つの著作で教育する側とされる側の問題を論じたことになる。教育する側の問題を論じた『教師及び校長論』の方の系譜を辿ると、『教育者の精神』と『ペスタロッツ』に行き着く。1895（明治28）年に出版された『教育者の精神』とそれに続く『ペスタロッツ』の2編にみられる沢柳の精神は、その後更に発展し、『教師及び校長論』と翌1909（明治42）年2月に刊行された『実際的教育学』という著述をうみ、遂には成城小学校の創立に至る<sup>(21)</sup>。被教育者側からの著述である『読書法』から『学修法』に続く系譜と、教育者側からの著述である『教育者の精神』、『ペスタロッツ』から『教師及び校長論』、そして『実際的教育学』に至る一連の著作は、それぞれ相互補完的に進展しながら結果的には成城小学校の教育実践に繋がっていくのである。

沢柳が『学修法』において問題の対象とするのは、「学修法の第一の原則は学生たる者は自発的奮励をなすべしと云ふにある<sup>(22)</sup>」と記すように、学習者の自発的な意欲や態度である。それは読書においても以下のように同様に要求されている<sup>(23)</sup>。

こゝに於て学生たる者、学校の課業を修むるの余暇余力を以て広く書物を読むことをせなければならない。殊に学校を卒業したる後に於て尚ほ学修を継続する方法は殆ど一に読書をなすによるのである。而して読書は一の習慣である。その習慣なき者は書籍を手にとると云ふことは出来ない。故に学生時代に於て読書の習慣を作らざる者は、学校卒業後修養を継続することは甚だ困難になるのである。（中略）知識のために言へば、如何なる書物を読んでも多少の利益があると云ふことが出来る。併ながら前節にも述ぶるが如く、単に多くを知るを以て足れりとするものでない。知識を得ると共に之に対して思考を費さなければならない。多きを貪るの結果として何等の思料なく、考慮なく、単に読む所を記憶すると云ふ弊に陥るのである。

学校を卒業した後の学修は、読書の有無に左右されることから、沢柳は読書習慣を身に付けることの重要性を指摘している。当然、ここには社会教育機関である図書館の存在が意図されているわけであるが、ここでは触れられていない。そして、「余り広く書物を見るの弊」や「雑然と書物を漫読する」弊害を指摘し<sup>(24)</sup>、書物の選択の重要性を指摘している。これは『読書法』において効率的な読書を勧めたことと一連の繋がりをもつものである。しかしながら、ここでは「知識を得ると共に之に対して思考を費さなければならない」というように「知識」を得るだけでなく、その後の「思考」する態度が強調されている。「多きを貪るの結果として何等の思料なく、考慮なく、単に読む所を記憶する」だけになってしまう弊を説いたのである。

外国の学説の紹介に大きなウェイトを置いた『読書法』と異なり、『学修法』において沢柳が説いたのは、外国のあるいは従来の勉強法、自修法、受業法とは異なるもので、学び修めるという学問と修養の概念を意味するものであった<sup>(25)</sup>。したがって、読書についても「今日世人のよく口にする所の修養なるものは、一生を通じて間断なきことを望むのである。真に心掛の良き者は学校を出た後にも読書を廃しない、人格の修養を努めて怠らない。斯の如きことは最も望ましいことである<sup>(26)</sup>」というように修養との関連で述べられる。

### 第三節 「教育学批判」における読書論

「教育学批判」は1909（明治42）年8月に東参一市四郡教育会連合夏期講習会における講演録である。これは当時の著名な教育学者達の著作に対して、①教育学上からみた場合と、②実際教育上からみた場合に分け、これら諸作を批評したものである。この中で、沢柳は、「読書



眼」という一節を設け、読書と図書館との関係について論じている。彼はこの中で、我が国において読書習慣が普及しない原因について考え、読書法との関連からその解決策を提示した。

上述のように、『読書法』においては効率的、合理的な読書が推奨されたが、『学修法』においては自律的な人格形成が説かれ、修養との関連で読書が論じられた。「教育学批判」では、「知識を開発する上に於ても、品位を高うしてゆく上に於ても、書物を読む事は大に効能のある事である。書物を読むと云ふ事は、単に知識を開発して時に後れぬ事のように考へられるが、あの人間は品のある人間である高尚な所のある人間であると云ふ人は、多くは読書の趣味をもつて居る人である。<sup>(27)</sup>」と述べるように両書の論旨を継承している。沢柳は、人間形成において読書の「効能」は非常に大きなものがあるが、我が国には他国に比べ読書習慣が広まっていない実状を問題とする。そして、我が国の国民が読書をしない理由について、①書物を読む施設である図書館が普及していないこと、②読むに値する善い書物がないこと、③書物を読んだ際に十分に利益を収めることができるようにする読書法を国民が知らないこと、を挙げている。つまり、読書という行為の中で、その場所である図書館の不備の問題、対象である書物の内容の問題、行為の主体である読者の能力である読書法の問題、を挙げるのである。②と③については、「現在の書物には非常に立派な書物はないかも知れぬが、幾分か善い所があり、幾分か滋養分をもつて居る。其の滋養をこちらに吸収する方法を各々心得て居りましたならば、書物は愉快なるもの、有益なるものとなるであろうと思ふのであります<sup>(28)</sup>」と述べ、①については「地方に図書館の起る事を希望し、又中央の図書館の如きは、今現に山口県で行つて効能のある巡回文庫の制を施かんことを希望するのであります<sup>(29)</sup>」と述べている。これまでの読書論の中では語られなかった図書館に関することが、国民の読書習慣を涵養するための施設という認識の下、ここに登場するのである。

## 第二章 沢柳政太郎の社会教育論と図書館

沢柳は、自らを図書館のことに關しては「門外漢」と称している<sup>(30)</sup>。確かに、彼は一生涯に膨大な数の教育に関する論述を残したが、その中で社会教育施設の一つである図書館について触れられているものは少ない。特に明治期においてはほとんど図書館に関しては論じられておらず、残された図書館に関する論稿もほとんどは大正期のものである。その理由として、図書館、あるいはもう少し広く言えば、社会教育に関しては、沢柳がそれを自らの研究の範囲外に置いていたからということが挙げられる。1909（明治42）年2月、沢柳は、彼の代表的著作ともいえる『實際的教育学』を刊行している。この中で、家庭教育、学校教育、社会教育は、等しく教育と称することができるが、「教育学に於て論ずる所の教育は必ずしも総て教育と称するものを包括しなければならぬと云ふ理由はないのである。寧ろ研究の便宜から正確に教育と云へる事実の範囲を限定する必要がある」という理由で、「自分は教育学に於て論ずる教育

の事実は、明に正確に学校教育に限る」とした<sup>(31)</sup>。このように、『實際的教育学』においては、沢柳は自らの教育学の対象を学校教育に限定するとしており、「社会教育と云ふが如きは、或は教育と云ふ文字の濫用であると称しても宜いかと思はれる。教育学上の意味を以て所謂社会教育なるものが施されて居るであらうか。」というように<sup>(32)</sup>、社会教育に対しては極めて冷淡であった。ただし、沢柳の社会教育に対する認識も大正期になると大きく変化する。1920（大正9）年12月に『帝国教育』誌に掲載された「社会教育機関の充実」においては、学校教育と社会教育の関係について次のように言及している。

学校教育は社会教育と相待たねばならぬものである。即ち多くの場合学校教育を終つたものが社会教育圏内に入つて来るものであるから、学校教育は実に社会教育の素地をなすものである。従つて学校教育に於て読書の趣味と習慣とを養ふことが出来て居たならば既に社会教育の根柢が築かれたものであつて、各人にとつて此上なき利益であると思はれるといふことである。<sup>(33)</sup>

『實際的教育学』における社会教育論と比較して、どのような特徴があるのか。竹本英代は、「1つはこれまでの沢柳の認識にはみられなかった意見であり、学校教育と社会教育の連携が必要であること。2つめは成人教育につながる理解として、社会教育は学校教育を修了したものの教育であること。3つめは学校教育は社会教育の素地であることである。<sup>(34)</sup>」というように「社会教育機関の充実」において示された沢柳の社会教育論の特色を指摘している。ところで、この中の、社会教育は学校教育を修了したものの教育であること、学校教育は社会教育の素地である、という点に関しては、これを「読書」に置き換えると、明治末期に発表された読書論の中の考え方と何等変わりが無いことに気づく。先述した『学修法』における「学校を卒業したる後に於て尚ほ学修を継続する方法は殆ど一に読書をなすによるのである」、「学生時代に於て読書の習慣を作らざる者は、学校卒業後修養を継続することは甚だ困難になるのである」という記述<sup>(35)</sup>や、「教育学批判」において読書習慣を広めるための方策として第一に図書館の設立を挙げていたことは、まさに学校教育を修了した後の読書が社会教育施設である図書館で行われることを想定していたと思われるし、学生時代における読書習慣の重要性を訴えるのは、社会教育の素地としての読書習慣の涵養ということになると考えられる。したがって、確かに大正期に入り沢柳の社会教育論には変化が現れ、図書館論も増加するが、その論旨の根本的な部分は変化していないといえるのである。

### 第三章 沢柳政太郎と図書館教育

#### 第一節 沢柳政太郎の図書館論

我が国の公共図書館は、明治30年代以降ようやく本格的に普及し始め、明治末期から大正初期にかけては、内務省を中心とする地方改良運動の後押しもあって、全国的に驚くほどの数の図書館が設立された。その後、大正期を通じてその図書館の増加傾向は続き、1919（大正8）年の臨時教育会議の答申以後は、青年団を中心とする教化団体により、なおいっそう強力に図書館設立が推進された<sup>(36)</sup>。沢柳の図書館論が発表されるのは、ほぼこの時期に当たり、したがって社会教育との関連で公共図書館について論述したものが多い。ただし、先述の通り、この時期の沢柳の社会教育論の特徴として学校教育と社会教育の連携が挙げられ、彼の図書館論もまた、単なる社会教育施設という側面だけを論じたものではなく、学校教育、社会教育、双方との関連から図書館の在り方が示されている。また、彼は1917（大正6）年に成城小学校を創設しており、この前後には学校教育における図書館を活用した教育についても論じられている。それが成城小学校の図書館教育の理論的基底となり、小原国芳や奥野庄太郎などの成城小学校同人によって実践されていくのである。

次に沢柳が発表した図書館に関する論稿を示す。

- ①1914（大正3）年1月 「図書館の教育的任務に就て」（『図書館雑誌』19号）
- ②1916（大正5）年9月 「教育の効率増進の方案」（『帝国教育』410号）
- ③1918（大正7）年5月 「序」（田中敬著『図書館教育』）
- ④1920（大正9）年12月 「社会教育機関の充実」（『帝国教育』461号）
- ⑤1926（大正15）年9月 「図書館の発達に就いて」（『図書館雑誌』82号）

上記で述べられた沢柳の図書館論をまとめると、1つは教育機関としての図書館の働きを分析している、2つは学校教育において図書館活用能力の養成が必要であること、3つは学校教育効率化の観点から図書館活用の意義を論じている、4つは社会教育機関として公共図書館の質的・量的な充実が必要であること、の4点に要約される。

#### 第二節 図書館の教育機能

沢柳は、図書館は社会教育上、重要な教育機関であるとの認識をもっており、その教育機能についても明確にする必要があると考えた。1913（大正2）年に開催された日本図書館協会の総会における沢柳の講演録①「図書館の教育的任務に就て」は、教育機関としての図書館の働きを分析したものであった。この講演に関して、田中敬は「大正二年の夏大阪市で開かれた図書館大会に於て、時の京都帝国大学総長沢柳博士は『図書館の教育的任務に就て』といふ題で



講演せられ、図書館が教育機関であるとしたならば即ち教育を施すのであるから、施すものと受けるもの、換言せば教育の主体と客体とが具はらねばならぬ、而して其の主体は館長及び司書であり、其の客体は学生以下の社会公衆であるべきであろうと論じ、此の立場から図書館員の努むべき点を詳説せられた。図書館教育の意義を教育学上から論究したのは我が国では恐らく博士が其の第一人者であらうと思ふ。<sup>(37)</sup>」と述べている。

田中敬が評したように、沢柳は、「図書館は教育の機関」であるとして、教育の主体と客体に分ち図書館を論じている<sup>(38)</sup>。図書館は社会教育の機関であるから、社会全体を相手として教育を行う。しかし、沢柳は図書館が教育の対象とすべき範囲を社会全体とするのは広すぎるとした。もう少し図書館の対象とする範囲を限定すべきだと論じている。彼は、公の図書館は寧ろ学校以外の者を相手として教育するのが好ましいとし、多数の国民は僅に小学教育を受けただけで、最早学校教育を受けなくなるから、学校教育修了後の国民を対象とした教育機関として、図書館が存在することに意義があると考えた。

では、図書館における教育の主体と客体は何になるのだろうか。彼は、図書館の場合、教育者すなわち教育するものは、「黙って居る所の書物」が教育者に当たる働きをするのか、それとも「図書館長並に図書館員、司書」がそれであるのか判断に迷うところがあると述べる。しかし、前者については、図書館における書物の働きは重要なものであり、「書物と云ふものは図書館に取っての生命である<sup>(39)</sup>」とその重大性を認めるものの、書物そのものが教育であるとするのは如何なものであろうかと疑問を呈している。そして、後者の立場から「矢張り図書館員と云ふ者が即ち教育をする<sup>(40)</sup>」のであって、図書館における教育の主体は図書館員、司書であるとする。では、図書館の教育者である図書館員は、「如何なる資格を有するもので、如何なる仕事」をするものなのだろうか。この点について沢柳は、「図書館員は圖書の選択をする、(中略)或は圖書の目録を作る、圖書の整理をする、或は之を保存する」ことが、図書館員なる教育者の任務であろうと述べている<sup>(41)</sup>。ただし、それだけでは「唯見んと欲する所の書物が、見出し能く目録に作られて居る、陳列されて居ると云ふだけ」になってしまい、図書館員と利用者との関係が間接的に過ぎる。「もう少し閲覧者と図書館員と云ふ者とが、密接、直接の関係がなければならない」から、教育者である図書館員と被教育者である利用者との直接的交渉であるところの参考業務や読書運動というものが大切になるのではないかと、とする。特に、「読書に対して趣味を起させると云ふことが、非常に必要」というように、読書趣味の喚起ということが強調され、「学校教育に於ても、単に或る講義をするとか云ふだけに止まらずして、長く学問に対する興味又は書物を読むと云ふ趣味を養はねばならぬ」と、学校教育における図書館活用能力の養成について述べている<sup>(42)</sup>。

もっとも、このように図書館の機能を教育機能にのみ強調することは、ある種の問題も孕んでいる。岩猿敏生は、「図書館活動をもっぱら教育的機能の面において理解しようとするとならば、図書館教育の目的をどこにおくかによって、大きな問題に逢着することになる。明治

以降戦前までのわが国の社会においては、図書館教育の目的を国家目的に即応させることによって、結局は図書館を国民に対する国の教化機関として機能させることになり、ついには、国民に対する思想統制の役割まで負わせることになった。<sup>(43)</sup>」と、その危険性を指摘している。この時期、爆発的に増加した図書館の多くは、国家目的に合致した「健全有益ノ図書<sup>(44)</sup>」を備え付け、国民教化の拠点としての役割を期待されていた。こうした状況で、図書館教育の目的から個人の目的が捨て去られ、国家目的のみが強調された場合、個人の読書要求に応えるといった図書館の本来的な活動は完全に阻害される。しかしながら、沢柳の図書館論は、その読書論が人間形成における学習主体の自発性を重視したように、「教育や学習の基調は児童の自由なる拘束されない自発的活動にある<sup>(45)</sup>」という「個」を重視した教育観の上に立ったものであったことを忘れてはならない。

### 第三節 学校教育と図書館

沢柳は、②「教育の効率増進の方案」において、学校教育の効果を増進するという観点から図書館の活用について論じている<sup>(46)</sup>。ここでいう効果とは、教育の目的に即して効果的であるということである。彼は、「教育の目的については、（中略）畢竟人を造ると云ふことに外ならぬ」とし、全ての教育の方法が、人間の能力を養成することを目的とすべきであるとする。しかしながら、現実の教育は、形式主義と注入主義に陥り形骸化しており、「即ちその知育は主として注入教授と試験制度とに重きを置いた結果、徒らに記憶暗誦の弊に流れ、浅薄な模倣に陥り、創作工夫の能を欠き、実務に疎く、その訓育は巧慧便佞の性質を養ひ、虚偽虚飾の風を助長し、射利享楽を喜ばしむるに至つた<sup>(47)</sup>」と主張する。彼が目指すところの本当の教育は、人間の本性、児童の天分、各自の持って生まれた特性才能を啓発するところにある。そのためには「児童をして自ら学び自ら研究するように仕向ける事は教育法として最も望ましい又効果の多いものであるということ、及び自学自習ということが学修上第一の原則<sup>(48)</sup>」として、自学主義の教育が採られることになる。

「自ら学び自ら研究する」という学習観に立った場合、図書や図書館の持つ意味は非常に大きくなる。沢柳は図書について、「書籍なるものは、世界又は一国の知識の宝庫である。学者、識者が脳漿を絞って作り上げたものである。書籍は人間の知識の具体化したもの、中で、最も尊重すべき又最も内容の豊富なるものである。<sup>(49)</sup>」と述べる。そして、人を教育するに当たっては、この貴重なる図書というものを十分に使用する事が大切だとして以下のように主張する。

今日の教育者はかくの如き貴重なるものが社会に存在して居ることを毫も認めず、苟も必要なる知識は、一切之れを学校に於て授けんとして、そして苦心して居る。（中略）こゝに於て学校の教育はいつ迄も注入教育である。抑々開発教授と云ふことは、今から三十年も以前

より唱へられて居て、教育者は毫も之れに異存を表して居ない。然も實際の教育は常に注入教育に陥って居る。畢竟書物があつて、苟も教育あるものゝ自由なる使用を俟ちつゝあるを忘れて、人が此社会に於て必要とする知識は、一切之れを学校の教科によつて授けんとするのである。或は又形式陶冶と称し、被教育者の心力を發育せしめんとするものは、たゞ児童の記憶なり、判断なり、推理なりの能力を強からしめんと焦って居る。もとより是等の能力は或程度迄発達せしめなければならぬけれども、古今東西の人が、或は判断し、或は推理したる結果を、自由に利用することを考へなければ、如何に個人の知能を発達せしめたからと云うて、其力は誠に知れたものである。<sup>(50)</sup>

我が国の教育界においては明治10年代に開発主義が導入されていたが、結局は形式的な枠組みの中にこの教授法がはめ込まれ、実物の直観と問答を通して「心性の開発」を図るという本来の意義は失われていった。成城小学校においては、こうした形式化した開発教授ということでは無く、本来の意味での被教育者の心意の発達に即応した「開發的」な教育方法が志向されていた<sup>(51)</sup>。よって、沢柳は、ここでも図書の利用という観点から、その「自由なる使用」を忘れて、必要な知識を全て学校教育において授けようとするれば、それは「器械的な」注入主義に陥るとしている。

また、形式陶冶についても図書の自由な利用を考えなければ「其力は知れたものである」と述べる。古来、学校教育はその方法の上で「教授」と「訓育」に大別されてきたが、「教授」はさらに知識の習得を主とする内容的側面（実質陶冶）と知識に働きかける能力の育成を主とする形式的側面（形式陶冶）に区別されてきた。沢柳は、実質陶冶と形式陶冶の重要性をそれぞれ把握しながらも、「若し強ひてこの間に区別を付けるとしたならば、寧ろ形式的任務を以て重しとしなければならぬ<sup>(52)</sup>」と述べ、相対的には形式陶冶をより重視した。彼の形式陶冶論では、心理学との関連から、人間の知的作用を「記憶」「概念」「判断」「推理」および「思考」の5つに分け、とりわけ「思考」が重視されている<sup>(53)</sup>。しかし、こうした「記憶」や「概念」や「判断」などの知的作用をいくら発達させようと努力をしてみても、自由な図書の利用ということが無ければ効果的とはいえない。例えば、ある事を研究しようとする時に、図書を利用し、参考にすることをしないで、自らの知能を以ていくら努力・工夫したとしても、その結果は「努力する所多くして、得る所は甚だ少い」と沢柳は主張する<sup>(54)</sup>。

沢柳は、図書館を「人間の知識の結晶したるもの」と考えており、図書及び図書館の活用や、学校においてこれらを利用することを教えることが、教育方法上の「一の新らしい見地」であると主張した。つまり、先に述べた開発教授や形式陶冶などの教育方法上の改善を図るよりも「図書並に図書館と云ふ人間の知能の結晶したるものを利用することを教へる」ことの方が遥かに大きな効果を生み、「教育の能率増進に関して、最も有効なる方法」と考えたのである。その具体的な方法については、「図書館の最も発達し最も普及して居る国」である米国に

における図書館利用法が参考にされたと思われる。沢柳の論文と同誌同号に掲載された山口県立山口図書館長佐野友三郎の論文には米国における学校教育での図書館の利用指導法が紹介されており、そこには「生徒の一般読物に対する趣味を喚起し之を指導する為め」の方法として以下のようなことが記されている<sup>(55)</sup>。

- 一、生徒をして読了せる書籍に就きて其の梗概を述べしむること、
- 二、一般読書の誘導として毎週図書館時間を定むること

これは、この論文が掲載された翌年の1917（大正6）年に創設される成城小学校において実施された読書時間の内容とほぼ同じものである。沢柳はこの佐野の論文や和田八重造が米国における通俗教育機関としての図書館を紹介した論文に対して、「我国の教育者は是非両君の論文を精読して貰ひたいと思ふ」と述べ、米国における自学自修の方法なども含めて「自分も此の方法を我が国の学校に於て実行したいと考へて居る」と記している。成城小学校創立の準備は既に前年の1916年の春頃から始められていたので、これは成城小学校における教育方針の一部を表明したものと考えることができる。このように、成城小学校における読書時間の特設は、沢柳の読書論や図書館論の理論的基盤の上に、米国での実践事例が参酌され、実施に至ったと考えられるのである。

## おわりに

我が国の大正新教育運動における新教育の概念は、欧米で使われる場合に比べるとかなり多様な意味内容をもっていた。大井令雄は、欧米の新教育の特徴を、「その開拓者といえるドモラン、デューイ、エレン・ケイ、モンテッソリ、ドクロリ其他に共通して、欲望や衝動の解放発展による自由な自己活動を重んじること、画一教育を否定して子供の個性を重んじること、生活や労働のもつ教育的意味を強調することなどの教育上の立場をさして、包括してそれは自然主義の立場であると規定することができる。それはパブリック・スクールに代表される倫理的訓育を重視し、人格の陶冶をめざした理想主義的学校としての旧学校を批判、超克しようとするものであった。そこには欲望を抑制して理性的人間の育成をめざす理想主義教育は、人間をして益々小さくさせ萎靡沈滞させるものであるとして、むしろそれを解放させることにより、資本主義確立期における国家間の競争や産業化社会の諸問題に積極的に対処し、生きて働く活人物の育成がめざされていた。<sup>(56)</sup>」と指摘する。

それに対して我が国の新教育の場合は、このような自然主義的自由主義の思想だけではなく、その他にも儒教、仏教、神道などの日本の伝統的な思想、王陽明らの東洋思想、それにキリスト教、社会主義、ドイツ理想主義といった東西諸思想から多様に影響を受けて成り立って

いた。

沢柳政太郎の場合は、彼自身が十善戒の熱心な信奉者であったこと、釈雲照や清沢満之との交流などから、その思想形成に仏教が与えた影響は計り知れないものがある。ただし、沢柳の教育思想の基礎に仏教による自律的人間形成の考え方が存在することは事実としても、彼の仏教的人間形成論がそのまま全面的に彼の新教育思想を規定していると論断するのは余りに唐突であり、やはり西洋の近代思想などの外発的なものの影響も多分あったとみるのが妥当であろう<sup>(57)</sup>。沢柳が『読書法』において当時一流の外国の学説を紹介し、読書を合理的に解説したのは、まさに西洋の近代思想を受容した結果である。ただし、『学修法』において修養との関連で読書が説かれたのは、彼の教育思想の根底にある仏教的な自律的人間形成の思想が表出したものであると考えることができる。また、読書論を継承する形で展開された図書館論においては、①教育機関としての図書館の機能、②学校教育において図書館活用能力の養成が必要であること、③学校教育効率化の観点からみた図書館活用の意義、④公共図書館の質的・量的整備拡充の必要性、について論じられているが、これらにはその根底に、図書館が読書による自律的な人間形成を支えるための施設であるという『学修法』で説かれた修養に通ずる原理が存在するのである。成城小学校における図書館教育は、こうした沢柳の図書館論を基盤として、米国での実践事例などが参酌され、実施に至ったと考えられるのである。

〔注〕

- (1) 国分一太郎「学校図書館以前の読書教育運動—局地的な概観—」『学校図書館』第136号、1962年2月、p.8
- (2) 沢柳の初期の著作の中で図書館に関するものに、1888年11月、『学士会月報』に掲載された「帝国大学図書館新築ニ就テ沢柳政太郎少シク申述ブ」がある。これは、帝国大学図書館が新築されるに当たって、その閲覧室の広さについて考えを申し述べたものであるが、図書館を論じたというよりは、利用者の立場に立って意見を發表したという側面が強い。
- (3) 沢柳政太郎『読書法』寛永館、1892年5月（成城学園沢柳政太郎全集刊行会編『沢柳政太郎全集』第2巻所収、国土社、1977年10月、p.19）以下、『沢柳政太郎全集』は『全集』と略記する。
- (4) 出口一雄『読書論の系譜』ゆまに書房、1994年2月、p.176
- (5) 沢柳『読書法』前掲、p.23
- (6) 沢柳『読書法』同上、p.23
- (7) 沢柳『読書法』同上、pp.23-24
- (8) 沢柳『読書法』同上、p.31
- (9) 沢柳『読書法』同上、p.30
- (10) 沢柳『読書法』同上、pp.31-33
- (11) 分量主義とは、成城小学校の国語教育において実施された多教材提供主義のことである。古閑停は「分量主義の国語教授とは言ふまでもなく、児童の前に広汎なる材料を提供して、それぞれ児童の個性に従つて自由選択をなさしめんとするの謂である。」と述べている。（古閑停「国語教授上の重要問題（一）（二）」『教育問題研究』第1号、1920年4月、p.41）



- (12) 沢柳政太郎「読むこと、書くことは並行しない—成城小学校に於ける一発見—」『教育問題研究』第3号,1920年6月（『全集』第4巻所収,p.179）
- (13) 沢柳『読書法』前掲,p.25
- (14) 沢柳『読書法』同上,p.44
- (15) 沢柳は、1890、91年頃に、デューイの心理学をもとにした講義を哲学館で行っている。また、デューイが学校の中に図書室を明確に位置づけた『学校と社会』についても、「最も早くデューウィの著書の我が国に紹介されたのは明治三十七八年の頃私が文部省の普通学務局長時代に教授の著書『学校と社会』を文部省で反訳出版して全国の学校へ配付したことがある」と述べており、デューイの学説に対しては早くから関心を持っていたことを窺うことができる。（沢柳政太郎『デューウィ教育学説の研究』を読む）『教育問題研究』第11号,1921年2月（『全集』第4巻所収,p.242）
- (16) 水内宏「解説」『全集』第8巻 p.633
- (17) 沢柳政太郎「児童の言語習得に関する臆説」『児童語彙の研究』附録,1919年5月（『全集』第4巻所収,p.132）
- (18) 沢柳政太郎「小学校新入学児童の語彙調査に就て」『帝国教育』第442号,1919年5月（『全集』第4巻所収,p.125）
- (19) 沢柳政太郎『学修法』同文館,1908年12月（『全集』第2巻所収,p.58）
- (20) 沢柳『学修法』同上,pp.56-57
- (21) 新田貴代『沢柳政太郎 その生涯と業績』成城学園沢柳研究会,1972年7月,p.80
- (22) 沢柳『学修法』前掲,p.71
- (23) 沢柳『学修法』同上,pp.89-90
- (24) 沢柳『学修法』同上,p.90
- (25) 中内敏夫・上野浩道「解説」『全集』第2巻,p.506
- (26) 沢柳『学修法』前掲,p.75
- (27) 沢柳政太郎「教育学批判」1909年8月（『全集』第1巻所収,p.252）
- (28) 沢柳「教育学批判」同上,p.253
- (29) 沢柳「教育学批判」同上,p.253
- (30) 沢柳政太郎「図書館の教育的任務に就て」『図書館雑誌』第19号,1914年1月,p.17
- (31) 沢柳政太郎『実際的小学教育学』同文館,1909年2月（『全集』第1巻所収,pp.54-55）
- (32) 沢柳『実際的小学教育学』同上,p.55
- (33) 沢柳政太郎「社会教育機関の充実」『帝国教育』第461号,1920年12月（『全集』第3巻所収,p.415）
- (34) 竹本英代「沢柳政太郎の社会教育制度論」『広島大学教育学部紀要 第一部（教育学）』第45号,1997年3月,p.103
- (35) 沢柳『学修法』前掲,p.89-90
- (36) この間の図書館数の推移を示すと以下のようになる。
  - 1897（明治30）年 31館
  - 1902（明治35）年 67館
  - 1907（明治40）年 151館
  - 1912（明治45）年 541館
  - 1917（大正6）年 1,237館
  - 1922（大正11）年 2,390館
  - 1927（昭和2）年 4,306館

- (文部省『学制百年史』資料編, 1972年10月, p.450)
- (37) 田中敬『図書館教育』同文館, 1918年5月, p.9
- (38) 沢柳政太郎「図書館の教育的任務に就て」『図書館雑誌』第19号, 1914年1月, p.p.17-24
- (39) 沢柳「図書館の教育的任務に就て」同上, p.20
- (40) 沢柳「図書館の教育的任務に就て」同上, p.20
- (41) 沢柳「図書館の教育的任務に就て」同上, p.20
- (42) 沢柳「図書館の教育的任務に就て」同上, pp.21-22
- (43) 岩猿敏生「解説 田中敬と「図書館教育」」『図書館教育』(復刻図書館学古典資料集), 日本図書館協会, 1978年7月, p.3
- (44) 1910年2月の文部大臣訓令「図書館施設ニ関スル訓令」では, 「図書館ニ在テハ健全有益ノ図書ヲ選択スルコト最肝要ナリトス」というように, 国民教化の機関としての役割が強調されている。
- (45) 沢柳政太郎「本当の教育」1927年6月成城小学校創立十周年祝賀会席上演 (『全集』第4巻所収, p.398)
- (46) 沢柳政太郎「教育の効率増進の方案」『帝国教育』第410号, 1916年9月 (『全集』第4巻所収, p.p.74-78)
- (47) 沢柳政太郎「大震災火災に関し教育家並に一般国民に訴へる」『帝国教育』第495号, 1923年11月 (『全集』第8巻所収, p.547)
- (48) 沢柳政太郎「序」自学奨励会編『自学主義の教育』1919年3月 (『全集』第4巻所収, pp.120-121)
- (49) 沢柳政太郎「教育の効率増進の方案」前掲, p.76
- (50) 沢柳「教育の効率増進の方案」同上, pp.76-77
- (51) 水内宏「沢柳政太郎の教育と思想」『教育学研究』第34巻第1号, 1967年3月, p.11
- (52) 沢柳『実際的教育学』前掲, p.131
- (53) 水内宏「沢柳政太郎の教育と思想」前掲, p.14
- (54) 沢柳「教育の効率増進の方案」前掲, p.77
- (55) 佐野友三郎「学校教育に於ける図書館の利用」『帝国教育』第410号, 1916年9月, p.8
- (56) 大井令雄『日本の「新教育」思想—野口援太郎を中心に—』勁草書房, 1984年4月, p.161
- (57) 鈴木美南子「教育者沢柳政太郎における仏教思想」『フェリス女学院大学紀要』第8号, 1973年3月, p.118

(やまだ よしあき 教育学科)  
(わたなべ ゆういつ 佛教大学非常勤講師)

2006年10月19日受理